

トラウマの恋にて  
取扱い注意!?

*S h i b o & R y o u*

---

沢上滯羽

*Reiba Sawakami*

*eternity*



エタニティ文庫

目次

トラウマの恋にて取扱い注意!?

5

書き下ろし番外編  
十年ぶりの十秒前と十秒後

327

トラウマの恋にて取扱い注意!?

## 1 ト라우マとの再会

ああ、またあの夢を見ている——と、私にはすぐにわかった。時は十年前、場所は通っていた高校の校舎だ。バカみたいに息を切らして、階段を駆け上っている私が見える。三階の教室にいるあの人に会いたい一心で。今日こそ「好きです」と伝えようなんて、無謀な決心を胸に秘めて。

やめておけばいいのに。いやいや、やめておきなさい。傷付くだけだから。そんな私の言葉は、夢の中の私に届くはずもない。

できるなら、全力で阻止したい。でも、もう何十回も試したけれど、阻止できたことなど一度もないのだ。夢だもの。わかっている。

その間にも、高校生の私が階段を上りきり、彼のいる教室のドアに手をかける。

この後の出来事は、何度夢に見ても慣れるものじゃなかった……だから、見たくなくて聞きたくなくて、私は目を閉じ耳を塞いだ。

でも、その結末からは逃げられない。

「志穂って、色気ゼロ。とても女とは思えないって」

それはドアを開ける前に聞こえてきた、友達と笑い合う大好きな彼の声だ。

ああ……何度聞いても、この言葉は私の心を抉る。

初恋の人は、私を女と思っていなかった。

夢だってわかっているのに、胸が苦しくて痛い。

その時、私の視界がぐらりと揺れ、足下にぽっかりと穴が空く。私は抵抗もせずその穴に落ちた。この夢から抜け出せるなら、もう、どこに落ちたって構わない……

がくん、と落下する感覚にびくっと体を揺らし、森園志穂は突っ伏していたテーブルから顔を上げた。ほんやりとした視線を巡らせ、アラムを響かせている携帯に手を伸ばす。

「……やだ、もう朝じゃない」

志穂は呻くように呟いてアラムを止めると、ぼさぼさの髪の毛を乱暴に掻き上げた。テーブルの上には、飲みかけの芋焼酎の入ったグラスと、食べかけの焼き鳥がそのままになっている。昨夜、借りてきたDVDを見ながら晩酌しているうちに、どうやら寝てしまったらしい。

テーブルに突っ伏した姿勢で眠っていたせいで、あちこち軋む体をなんとか起こし、志穂は深々ため息を吐き出した。

「……嫌な夢を見ちゃったわ」

志穂は苦々しく呟く。

先程まで見ていた夢は……昔、志穂が実際に体験したことだった。思い出したくない過去、黒歴史と言ってもいい出来事。

高校一年生の時、志穂は同じ陸上部のふたつ年上の先輩に恋をした。

彼はいつも志穂を気にかけてくれていて……だから、もしかしたら彼も私を——なんて、正直少し自惚れていたのだ。

けれど……結果は夢の通りだ。告白するまでもなく、志穂の恋はあっけなく砕け散ってしまった。しかも「色気がなくて女とは思えない」という、ぐっさり心を決る理由で。

志穂の性格がダメ、とかなら落ち込みはしてもまだ納得できたかもしれない。でも色気がないなんて理由は、あんまりだ。

そんなに色気が大事なのかと猛烈に腹が立ったのと同時に、立ち直れないほど落ち込んだ。両想いかもと自惚れていたため、実際は女とも認識されていなかったという事実、志穂の心は深く傷付いたのだ。十年経っても夢に見るくらいに。

再び大きなため息をついた志穂は、立ち上がってすっかり凝り固まった筋肉を解すよ

うに思い切り伸びをした。

それから背中まである髪の毛を結わえると、「よし」と小さく声を出す。そして、てきぱきと出勤準備をはじめた。

眠気覚ましに熱いシャワーを浴びた後、お弁当を作る。そして派手に見えないメイクを入念にし、髪の毛を緩く巻いて……

全ての準備を済ませた志穂は、鏡の前に立って色々な角度から自分の姿をチェックした。

——女子力ありそうに見える……よね？

隅々までチェックした限り、おかしいところはないはずだ。だって、今まで散々女性らしく見えるスタイルを研究してきたのだから、大丈夫に決まっている。

『色気ゼロ。とても女とは思えない』

彼のその言葉を聞いた時、志穂はそれを否定できない自分に気付いた。だからこそ、余計に傷付いたのだ。

高校時代の志穂は、短距離走に命をかけた生活をしていて、真っ黒に日焼けした野生児のような外見をしていた。お洒落になんて興味もなかったし、色気なんてものとはほど遠い容姿だったのは間違いない。

だけどそれが普通で、それでいいと思っていた——あの言葉を聞くまでは。

彼の言葉で、志穂はそれまでの意識を変えた。

——もう二度と誰にもあんなことは言わせない！

それをモットーに、絶対に色気のある女になってやると心に誓ったのだ。

とは言っても、色気を身に付ける方法なんてわからない。だからまずは女子力を上げようと、それまで見向きもしなかったファッション雑誌を買い込んで、服装や髪型やメイクを研究しまくった。更に料理ができれば女子力が上がる気がして、ほとんどやったことのない料理もはじめたのだ。

けれど一番大変だったのは、女性らしい仕草を身に付けることだった。

足を広げて座らない、という初歩中の初歩からはじまり、笑い方、食事の仕方、歩き方立ち方……街行く人を観察し常に研究を続けてきた。

メイクにしても料理にしても振る舞いにしても、投げ出したくなかったのは一度や二度ではない。

なんでこんなこと頑張っているんだろうと、嫌になったことも数え切れないくらいある。ずぼらでがさつで要領の悪い自分には、何度絶望したことか……

でもその度に、彼の言葉が耳の奥にはつきりと蘇<sup>よみがえ</sup>ってきて、絶対に女らしくなるんだと自分を奮<sup>ふる</sup>立たせてきたのだ。

そんな努力と頑張りの甲斐あって、こうして女らしく見えるまでになった。

鏡の中の自分をまじまじとチェックしていた志穂は、鏡に映った壁掛け時計を見て、「わっ」と大きな声を上げる。

「……っ、いけない！遅くなっちゃった……！」

大慌てでバッグを引っ掴<sup>つか</sup>み、志穂はばたばたと部屋を出た。

大きな通りに面したビルの一階にある人気のヘアサロン。ここが志穂の職場だ。

高校を出て美容師の専門学校に入った志穂は、卒業してからずっとこの店で働いている。勤続五年ともなると、ありがたいことに指名してくれるお客さんもたくさんできた。仕事にやり甲斐も感じている。

しかし、まさか自分が美容師になるとは考えもしなかった。だって、自分の髪の毛すら、邪魔にならないよう適当に結ぶくらいしかしたことがなかったのだから。

そんな志穂の今があるのは、悔しいがやっぱり彼の一言があつてこそなのだろう。

あの言葉がなければ、美容関係の仕事に興味を持つこともなかったはずだ。

——もしかして私は、先輩に感謝するべきなのかしら。

そんなことを考えながら、志穂は息を切らして職場——ヘアサロン『アクアマリン』の中に飛び込んだ。

「おはようございますっ」

志穂の声に、チリンと涼やかな鈴の音が重なる。店内はまだ開店準備の最中であり、どうやら遅刻は免れたようだ。

けれどほっとしている時間はない。志穂は急いでロッカールームへ向かい、大事な仕事道具の入ったシザーケースを腰に巻く。

髪は乱れていないだろうかと鏡を覗いたところで、突然後ろから「志穂さん」と声を掛けられた。

「ひゃあっ」

自分以外誰もロッカールームにいないと思いついていた志穂は、素つ頓狂な声を上げてしまう。

「あ、ごめんなさい。驚かせちゃいました？」

「……やだ、急に声を掛けたらびつくりするじゃないの。心臓に悪いわよ、アリサちゃん」  
志穂はなんとか穏やかな笑みを顔に貼り付けて振り返った。

本当は「びつくりしたじゃないのっ」と、大きな声を出したいところだが、女らしさを心がける志穂はそんな気持ちをごくごくと呑み込む。

「だって、いつもお店に一番乗りの志穂さんが遅刻ぎりぎりだったから、心配してたんですよ」

そう言って、大きな瞳で志穂のことを見上げてきたのは、三歳年下の後輩美容師、

佐々木アリサだ。新人の彼女を志穂が指導したのがきっかけで、いつの間にか仲良くなった。

……かなり厳しくしたから嫌われてもおかしくなかったのに、妙になつかれている。

アリサが言うには「私、DMなんで痺れました」なのだそうだ。

「志穂さん、どうしたんですか？ もしかして……具合でも悪いんですか？」

そう言ってアリサは、心配そうな表情で志穂の服を掴んだ。

小柄で可愛らしい顔をしたアリサは、なんとなく小動物を彷彿とさせる。その愛らしさに、志穂の胸は思わずキュンと音を立てた。

「ありがとぅ、アリサちゃん。ちょっと嫌な夢を見ちゃっただけなの。全然大丈夫よ」

「……よかった！ もうっ、すっごく心配したんですから」

アリサはそう答えると花が咲くように顔を綻ばせた。そんなに心配してくれるなんて、と志穂はちょっと感激してしまう。

「今日、仕事終わりに居酒屋で飲み会を予定しているんです。志穂さんも勿論きてくれますよね？ じゃないとアリサ、寂しいです」

胸の前で指を組み、首を傾げて上目遣いで見られ、志穂はうっと思を呑んだ。

アリサは可愛らしいだけでなく、時々同性の志穂から見ても色っぽいと思うことがある。こんなふうに誘われたら、男性ならきつとイチコロだろう。

——その色気、どうやったら身に付くの？  
 そんな疑問が口を衝いて出そうになる。やっぱりこういうものは天性のものなんだらうなとすらやましく思った。

「志穂さん？」

ハツとして顔を上げた志穂の視線の先では、アリサが不思議そうな表情で顔を覗き込んでいた。

「どうかしました？ ほら、急がないとミーティングがはじまっちゃいますよ」

「そ、そうね」

——やだ、あんな夢を見たせいで、なんだか今日は変だわ。

ひとつ息をついて、志穂は気持ちを切り替える。そして、もうあの頃とは違うんだから自信を持って、と自分に言い聞かせた。

アリサに促されてロッカールームを出ると、既に店員達が店の一角に集まっていた。

「あ、もうみんな集まってますよ、ほら、志穂さん急いで」

「ええ」

志穂の勤めるこの『アクアマリン』では、毎朝始業時間前のミーティングで、予約状況などの確認をしている。特に最近では、二号店出店に伴い登録したクーポンサイトの効果で、新規のお客様が増えているのだ。

さらに元々いたベテランの美容師が二号店に異動となり人手不足のため、この数週間目は目が回りそうなほど忙しい。今日も新規のお客様の予約が詰まっているようだ。

嬉しいことだが、きつと今日もまともに昼も取れないだろう。それでも志穂は明日休みだし、なんとか今日一日乗り越えれば……と、自分に気合を入れる。

その時、横からくいと服の袖が引つ張られた。

「志穂さん」

隣に立っているアリサがこっそりと耳打ちしてくる。

「今夜の飲み会、参加してくださいませよね？ ストレス発散しましょうよっ」

小さくウインクされ、志穂はくすつと笑った。

自宅に帰っても、大好きな芋焼酎を飲みつつ、お笑いのDVDを見て過ごすくらいしか予定はないのだ。それならたまには同僚と飲み会というのでもいいかもしれない。

「ええ、参加させてもらうわ」

そう答えると、アリサは嬉しそうに笑って「やったあ」と小さくガッツポーズする。

そんな彼女の姿を見ながら、志穂は可愛い後輩と楽しいお酒を飲むために、今日も一日頑張ろうと思った。

「それでは皆さん、今日も一日よろしくお願ひします」

店長の挨拶が終わり、それぞれが持ち場につく。志穂が準備を整えているうちに、ち



らほらと予約のお客様が店にやってきた。

志穂には朝イチから指名が入っている。いつも指名してくれる馴染みの若い女性の趣味に合わせ、雑誌を数冊手に取ったところで、店内にチリンと鈴の音が響いた。

店に入ってきたのがその女性だとわかり、志穂は雑誌を手にしたまま「いらっしやいませ」とにこやかに彼女を出迎える。

彼女の荷物を預かり、軽く天気の話をしつつ席まで案内した。

「今日はカラーとカットでよろしいですか？」

「はい。毛先だけ揃えてください」

「髪の毛、伸ばされるんですか？」

志穂は髪に、櫛を通しながら問いかける。

彼女が初めてここに来た時、たまたま担当したのが志穂だった。背中まで伸びた髪を切ってほしいと言われてショートボブにしたら、いきなり泣き出してしまったのだ。

泣きやんだ彼女から実は失恋したのだと聞かされ、志穂だけでなく店内にいた誰もが髪型のせいではなくてほっと胸を撫で下ろした……というエピソードがある。

あれから彼女は数ヶ月に一度店を訪れ、志穂を指名してくれている。今では彼女が志穂より二つ年下の保育士で、最近気になる相手ができたといいことまで知っている。

「ショートボブも似合ってますけど、きれいな髪だから伸ばすのもいいかもしれないで

すね」

志穂がそう言うと、何故か彼女は鏡越しに絶るような視線を向けてきた。

「あの……似合うと思いますか？」

そのあまりに必死な視線にびんときて、志穂はにっこりと微笑む。

「ええ。きつと似合いますよ。彼は長いほうが好きなんですか？」

多分そうだろうと思っただけだが、鏡に映る彼女の顔は、答えを聞く必要がないほど真っ赤になっている。あまりにも可愛らしいその反応に、思わず後ろから彼女を抱きしめたくなくなってしまった。

「そ……っ、それはわからないんですけど……でも」

そう言って彼女はそっと振り返って志穂を見上げた。

「その、私……志穂さんみたいになりたいたくって。でもどうしていいのかわからないから、まずは髪型から近付けてみようかな……なんて」

「私？」

あまりにも意外な言葉に、志穂は零れんばかりに目を見開いた。

抱きしめたいくらい可愛い彼女が、一体自分のどこに憧れちゃったりするんだろうかと不思議でならない。

「そんなこと言っただけなんですね、思っただけから、驚きました」

本気で言ったら、彼女はぶんぶんと大きく首を振った。きれいにとかした髪の毛が乱れ、志穂は慌ててもう一度櫛くしで整える。

「志穂さんはとっても女性らしくって……いつも穏やかで、癒やし系いやしけいっていうか……きれいだし。絶対に男の人って志穂さんみたいな人、好きですよっ」

実際の自分は、きつと彼女の思っている姿とは違う。けれど、彼女がそんなふうに感じてくれているのだとしたら、志穂の今までの努力も無駄ではなかったということだろう。

そう思えば、事実はどうあれやっぱ嬉しい。

「ありがとうございます。ますます努力しないとダメですね」

「そんな、それじゃあ、いつまで経っても追い付けないじゃないですか」

「そんなことないですよ。実は私も、女性らしくなりたくって、髪型やメイクや服装を雑誌で研究したり、街行く人を観察しまくったりしてるんです」

「志穂さんが？」

「はい。昔の私って、それはもうがさつで、男の子みたいでした。……って、他の人には内緒ですよ？」

そう言っただけで志穂は唇に人さし指を押し当てる。

「また……志穂さんたらそんなこと言っただけで、私に自信を付けさせようとしてるんですね」

「まさか。本当ですよ」

「えー、なんだか意外ですね」

「だから、色々聞いてください。私にアドバイスできることがあったら、全力でお答えしますから」

「ありがとうございます」

志穂の言葉に、彼女は嬉しそうに笑った。その顔を見て、志穂もまた嬉しくなる。

注文通りの髪型にすることは勿論大事だが、志穂としてはそれだけで終わらせたくないのだ。それはきつと、過去の経験から。

変わってやるんだと決心したあの時——なにか手を付けるべきかわからなくて、でもどうにかしなければと入った美容室。そこで、初めて会った美容師さんが、下手へたくそだった志穂のメイクに丁寧なアドバイスをくれたのだ。

——アドバイスをもたらしたことよりも、自分のことを一緒に考えてくれたことが嬉しかったんだよね……

髪にハサミを入れながら、志穂はしみじみとそんなことを思う。そこでふと、彼女の読んでいた雑誌の内容が目に入ってきた。

『色気のある小悪魔女子の作り方』

「色気って、作れると思います？」

考えるよりも先に、そんな言葉がぼろりと志穂の口から転がり落ちる。

「ご、ごめんなさい。たまたま雑誌の見出しが目に入って」

そう言って、彼女の見ている雑誌を指さす。

どうも志穂は、『色気』という言葉に過度に反応してしまう。まして今日は、朝からあんな夢を見たこともあって、余計に意識してしまっただけ。

——いけない、いけない。仕事に集中！

そう思って、カットに意識を集中させる。

「そうですね。色気って、持って生まれたものって感じがしますよね」

彼女からそんな言葉が返ってきて、志穂はカットの手を止めて隣きをする。

「……やっぱりそう思います？ 色気って、きつと才能みたいなものですよね」

「ええ、そんな気がします」

「ですよ」

そう。だから、どんなに努力しても身に付かないのだ。その才能がない志穂があがいたところだ——

「志穂さんもそういうの気になるんですか？」

「勿論ですよ！ 気になって仕方ないです」

「……えっ？」

咄嗟に本音が出てしまい、志穂はしまったと思う。こうなったら、無理に誤魔化してもしようがない。

「気になりますよ。毎日鏡とにらめっこです。どうしたら色気って身に付くのかしら、なんて」

十年間、毎日鏡を見ながら考えてきた。いくら女性らしい振る舞いを覚えても、それが色気に結び付いているのかよくわからなくて。

「志穂さんは、自然に身に付けてるんだと思ってました」

「身に付いてます？」

「付いてますよ！」

「うわあ、嬉しい。そんなふうに言ってもらえると、ちょっとほっとします」

お世辞かもしれないし、社交辞令かもしれない。だとしても、そう言ってもらえたことが嬉しくて、志穂はほっと顔を綻ばせた。鏡越しににっこり微笑む彼女と目が合い、なんだか照れくさくなる。

「志穂さんが色々努力してるって聞いて、私も頑張ろうって思いました。ずっと憧れの存在だったんですが、親近感が湧いてきちゃいます」

「やだ、本気出されたら、私なんてすぐに追い抜かれちゃう。私ももっと頑張らなくちゃ」

「じゃあ、志穂さんに追い付けるように頑張ります」

そう言う彼女の表情は、さつきよりもずっと明るい。そんな顔を見ると、志穂は心底嬉しくなった。

美容院にきてくれた人の髪をただ切るだけじゃなく、なにかちょっとでも力になりたいと思っているから。たいしたことじゃなくてもいい。自分がそうしてもらったように、前に進むお手伝いが少しでもできたら……そう思うのだ。

——十年前のあのことも、やっぱり今の私にはなくてはならない出来事だったのかもね……まあ、思い出すとやっぱり悔しいけど。

そうやって、いつかあのトラウマを「これが私を成長させてくれたのだ」と、胸を張って言えるようになりたい。

その道のりはまだまだ遠そうだが……いつかきつと。

「じゃあ、サイド揃えていきますね」

「よろしくお願いします」

にっこりと微笑んで、志穂は慣れた手つきでハサミを動かしはじめた。

店内には電話の音と、ひっきりなしにお客さんが入ってくる鈴の音が響く。今日も忙しくなりそうだ。

——よし、終業後の美味いお酒を目指して、全力でお仕事しますかっ！  
と、志穂はぐつと腕をまくった。

みんなで愚痴なんかを言い合いながら、食事とお酒を堪能して、忙しい仕事を乗り切る活力を得るのだ。

そうして仕事をこなしているうちに、時間はあつという間に過ぎていった。

仕事が終わわり、志穂はアリサを含む同僚四人で、居酒屋に行った。初めてきたそこは外観からしてすごくお洒落で、女性に生まれそうなお店だ。だが、居酒屋と聞いてすっかり赤ちようちんを下げた昔ながらの居酒屋を期待していた志穂は、がっかりしてしまふ。

……更に、店に入った途端、志穂は自分の置かれた状況がわかり、呆気にとられてしまった。

カーテンで仕切られた個室に通された志穂は、引き攣った笑みを顔に貼り付け、隣に座るアリサの手の甲をきゅつと指で摘まんた。

「アリサちゃん、これ、一体どういうことなの？」

「だから、飲み会だって言ったじゃないですかあ」

「職場の飲み会、じゃなかったの？」

「は？ アリサ、そんなことひとつことも言ってませんよ。言いましたっけ？」

「……うっ」

彼女の言葉に、志穂は反論できず唇を噛む。

アリサの言う通り、彼女は『飲み会』としか言っていない。それを志穂が勝手に同僚との飲み会だと思い込んだのだ。というか、同僚との飲み会だと思ったからこそ、参加する気になったのに。

確かに、この場にはアリサの他にも同僚がふたりいるので、間違いはない。だがその他に、テーブルを挟んだ向かい側に見知らぬスーツの男性が四人いた。彼らは揃って、こちらにちらちらと視線を送っている。

このシチュエーションを合コンと言わずしてなんと言うのだろうか。

「たまにはいいじゃないですか。皆さん一流企業の方達ですよ。こんなチャンス滅多にありませんからね」

「で、でも……っ」

「どうかした？ 飲み物頼むけど、なにがいいかな？」

こそこそアリサと話していると目の前の男性から声を掛けられた。志穂は咄嗟に、笑みを浮かべてそちらを見る。

少しだけ茶色がかった髪の毛に、気弱そうではあるが優しげな笑顔……この男性は、何度か店で見かけた気がする。

「甘いカクテルがいいな。あ、志穂さん、こちらはアリサの知り合いで林さん。何度か

店にもきてくれたんですよ」

と、アリサがその男性を紹介してくれた。

「ああ……やっぱり」

志穂がぼんと手を叩いてそう言うと、目の前の男性はぱつと顔を輝かせ、テーブル越しに身を乗り出してくる。

「覚えてくれていたんですか？ 嬉しいなあ。志穂さんはなに飲みます？ 志穂さんならきつとグラスワインとかですよ。お薦めのワインがあるんでそれでいいですか？」

「……え、ええ」

林の勢いに気圧けいおされつつ、志穂は小さくうなづく。

彼が志穂の印象をどう捉とらえてワインなんて言ったかわからないが、本当はワインよりも日本酒とか焼酎のほうが好きなのだが。けれど、それはさすがにこの場では言わない。アリサは志穂にこっそりと耳打ちしてくる。

「林さん、お店で志穂さんを見て一目惚れしたらいいですよ。今日の飲み会も、うちの会社の有望株を集めるから、絶対に志穂さんを連れてきて欲しいってしつこかったんですから」

「一目惚れって……」

アリサの内緒話に困惑しつつ、志穂はちらりと視線を上げた。ぱつちり林と目が合う。

「あ、あ、あの、飲み物と一緒に食べる物も注文しますが、志穂さんはどんなものがいいですか？ あつ、シーザーサラダとか……アヒージョとか、サーモンのカルパッチョなんてどうですか？ それから……このフォンダンショコラっていうのも美味しそうですよ。どうしますか？」

林はあわあわと慌てた後、メニューを見ながら機関銃のようにまくし立てた。

そういうのよりも、焼き鳥とかタコわさとかのほうが好きなんだけどなあ……とか、初めっからスイーツってどうなのかしら……とか思いはしたものの、林の必死な様子になんだか気が抜けて、志穂はふっと小さく微笑んだ。

「あの、お任せします」

「は、はい！ じゃあ、すぐに注文してきますー！」

林はそう言うのと、他のメンバー達からも注文を取り、その場をてきぱきと仕切っていく。

「林さん、すっごくいい人ですよ。エリートだし、結婚するくらいだと思いますよ」

アリサが茶化するように、耳元で囁いた。わざと耳に息を吹きかけられ、志穂は思わず片手で耳を押さえる。

「もう、くすぐりたいじゃない。……っていうか私、まだ結婚なんて考えてないわよ」

「結婚は考えなくても、彼氏くらいいたっていいじゃないですか」

「彼氏も……今は別にいいわ」

そう、家に帰ってひとりになった時だけ、志穂は心身共にリラックスできるのだ。

女らしく——とか、そんなことを考えずに、だからだと好きなように好きなことをして過ごせる。なのに彼氏なんて作ってしまったら……もう考えるだけで息が詰まってしまいそうだ。

事実、最初に付き合った彼氏とは、常に女らしい自分でいなければと気を張り過ぎて、そのうち一緒にいることさえ苦痛になって別れてしまった。次の相手には、正直に本当の自分を見せたら、騙されたと言われて振られてしまった。三人目の時は、もうどんな自分でいたらいいいのかわからなくなり、気が付けばあつという間に自然消滅していた。

だから、正直、今は彼氏なんて欲しくない。

というか、どうやって男の人と付き合えばいいのかわからない。

「志穂さんたら、もつたいない。その気になれば絶対モテるのに……っ！ もしかして、もしかしてですが……男性よりも、女性のほうが好き……とか？」

アリサがそんなことを真顔で聞いてくるので、志穂は一瞬きょとんと目を瞬かせた後、ぶつと盛大に嘔き出してしまった。

「そんなじゃないわよ。でも……今はひとりのほうが気楽でいいってだけ」

「気楽なんですか？ アリサは誰かいないと寂しいけどなあ……」

「寂しい……か」

寂しいよりも煩わしいほうが嫌だな、というのが今の志穂の正直な気持ちだ。でも志穂だっていつか、誰かと寄り添えたら……とは思っている。そう、いつか。

でも、自分が誰かと寄り添って生きている姿を想像できない。女性らしく振る舞うのは疲れるし、素の自分をさらけ出すのは怖い。

「わかりました。でも、せっかくなんだから楽しんでください。それにほら、もしかしたらこの中の誰かが、ひとりの気楽さを忘れるほど燃えるような恋をさせてくれるかもしれないよ？」

「燃えるような恋ねえ」

そんな台詞をやっぱり大まじめな顔で口にするアリサに、志穂はくすつと笑った。でも確かに、彼女の言うことには一理ある。

「アリサちゃんの言う通りかもね、気楽に楽しんでみるわ」

「そうですね、そのノリが大事です！」

アリサは親指を立て、白い歯を見せてにこつと笑う。もしかしたら彼女なりに、男の影ひとつない志穂を心配してくれているのかもしれない。

それに本当に、この中の誰かが長く連れ添う相手にならないとも限らないのだから。

「じゃあ、飲み物が揃ったので、乾杯しましょう」

林の掛け声で、志穂も目の前に運ばれてきたワイングラスを持ち上げる。グラスが触

れ合い、涼やかな音を立てた。

一日中ろくに休む暇もなく疲れた体に、アルコールが染み渡る。「ぶはーっ！ 美味

しいっ！」と声を上げたのをぐつと我慢して、志穂はにっこり微笑んでグラスを置いた。

それから次々と目の前に運ばれてきた料理をメンバー達に取り分ける。そのついでに、空になった器はまとめてテーブルの端に置き、グラスの空いた人がいれば、そつとメニューを差し出した。

「志穂さん、そんなに気を遣わなくても大丈夫ですよ」

そう林が声を掛けてくる。

「え？」

「グラスとか、器とか、そんなに気を遣わずに、志穂さんも食べたり飲んだりしてくださー」

「あ……すみません」

志穂は別に、気を遣っていたわけではなかった。そういう気遣いのできない自分を褒めようと意識しているうちに、すっかり身に付いてしまった癖のようなものだ。けれど、幹事でもなんでもない自分が、少し出しゃばり過ぎたかもしれない。

「そんなつもりじゃなかったんですけど、ごめんなさい」

志穂がぺこりと頭を下げると、林は慌てて大げさに首と手を振ってみせる。



「いえ、そういうんじゃないんです。志穂さんが気を遣ってばかりで、楽しんでないんじゃないかと気になっただけですから！」

「ありがとうございます。……なんていうか、その、動いていないと落ち着かなくって」  
志穂はそう言って苦笑を浮かべた。本当に落ち着かないのだ。気の利かない女だと思われるのが、怖いのもかもしれない……

「いくら落ち着かないからって、心配かけていたら駄目ですよね」

「そんなことないですよ。気遣いができる女性はとつても……その、素敵だと思えます。ただ、もつと楽しんでくれたらいいなと思って。アリサに関しては楽しみ過ぎですけどね」  
「ああ」

答えて志穂はくすつと笑った。飲みはじめてからそれほど時間が経っていないにもかかわらず、アリサはすっかり酔っ払っているようだ。真つ赤な顔をして、きやいきやいとはしゃいでいる。

「楽しそうでいいですよね、アリサちゃん。本当、可愛いです」

裏表がなくて、素直にその場を楽しめるアリサは、志穂にしてみれば眩しいほどだ。見ているだけでもアリサの楽しい気持ち伝わってくるようで、思わず頬が緩んでしまふ。

「いえ、でも……」

「はい？」

「僕はアリサよりも、志穂さんみたいな女性のほうが、いいと思います……っ」

真正面からそんなセリフを言われて、志穂の心臓は大きく跳ね上がった。かあつと、頬が熱くなってくる。

「そ、そんなことないですよ。私なんて……全然です。はい」

林の勢いに圧され、志穂は思わず身を引いた。けれど逆に林は身を乗り出してくる。「いいえっ、本当に志穂さんは素敵です。女性らしくて、気遣いができて、おしとやかに、きれいで」

自分を褒めてくれる林の言葉を聞いているうちに、何故か胸の奥が急速に冷えていくのを感じた。

「あの、よければ、今度ふたりで会えたりとか……」

「あ、すみません。なんだか携帯が鳴っているみたい。ちょっと失礼しますね」

「え……っ」

志穂はそう言うと、バッグを掴んで席を立った。なにか言いたげに志穂を見ている林に笑顔で会釈し、そそくさと個室を出る。そして、逃げるように化粧室へと駆け込んだ。化粧を直している先客の女性達を避け、志穂は奥の鏡の前に行くどバッグを開けた。

中から携帯を取り出す。勿論、着信の通知などない。



——林さんに悪いことしちゃったな。

林が嫌で逃げ出したわけではなかった。ただ、なんとなく……そう、なんとなく虚しく。  
 頭ではわかっているのだ。何度か店に来ただけの林が、最初からありのままの志穂を知っているはずがないことくらい。でもなんだか、外見を褒めてもらう度に、必死に隠している「本当の自分」を否定されているような気がして悲しくなったのだ。

勿論「本当の自分」なんて、付き合ってからゆっくり知ってもらおう以外ないって、ちゃんとかかっている。  
 それでもこんな気持ちになってしまったのは、やっぱり今朝見た夢のせいだろう。

——ダメダメ。せっかく誘ってもらった飲み会で暗い顔なんてしてたら、失礼極まりないわ。ちゃんとしなくちゃ！

鬱々としそうな気になる気持ちを切り替え、志穂はポーチから口紅を取り出す。最近買ったばかりの新品の口紅を唇に載せていると、聞くとともに先に先客の女性達の会話が聞こえてきた。

「ねえ、今日の飲み会、誰狙い？」

洗面台に化粧道具を並べ、丁寧に化粧直しをしている女性が他の女性に声を掛けている。声を掛けられた女性達は顔を見合わせた後、すぐに口を開いた。

「そりゃあソウマリヨウさんでしょう！」

聞こえてきたその名前に、志穂は反射的に首を捻り、彼女たちのほうを凝視してしまった。

「やっぱりそうだよねえ。企画部の出世頭って言われてるし、この前も大きなプレゼン成功させたらしいじゃない」

「しかもあの顔でしょ。彼女がいないってこと自体が奇跡だよね。狙わないはずないじゃない」

「ちよつと、抜け駆けはなしだからね！」

「抜け駆けだろうとなんだだろうと、選ぶのはソウマさんだから」

そこで女性たちは、零れんばかりに目を見開き、自分たちを見ている志穂に気が付いたようだ。化粧を直す手を止めて怪訝そうに見てくる。

「……あ、んっ、んんっ」

自分の不審さに気が付いた志穂は、不自然な咳払いをしながら再び鏡の中の自分を見た。けれど意識は彼女たちの会話に集中してしまっ。

「やっぱりそうだよね、あのメンバーの中だったら、ソウマさんがダントツだよね」

再開された彼女たちの会話の中に出てきた『ソウマ』の名に、志穂の胸は大きく脈打ち、口紅を持つ指先が震えてきた。

——ソウマリヨウ……相馬凌。

志穂の頭の中で、聞こえてきた名前が自然とそう変換される。その名は、聞き覚えがあるなんて生やさしいものではなかった。志穂にとって忘れたくても忘れられない名前だ。

かつて志穂のことを「色気ゼロ。とても女とは思えない」と言った、張本人。相馬凌。——本当に先輩？ いやいや、まさかね……

そんな偶然があるはずがない。ソウマリヨウという名前が、この日本に一体どれだけいることか。けれど、今朝見た夢も相まって、志穂はソウマリヨウの名に妙に動揺してしまった。

——でも、もしかしたら。……なんて、そんな偶然あるはずないわよ。

一瞬でも激しく動揺してしまった自分が急におかしくなり、志穂は思わず苦笑いを浮かべた。

彼が高校卒業後、地元を離れて大学に進学したところまでは知っている。だが、そこから先、どこでなにをしているのかはまったく知らない。

まさか、こんなところで再会するはずもないだろう。それに、あれからもう十年も経っているのだ。万が一の偶然があったとして、お互い気付けるわけがない。きつと——

志穂は震えの止まった手で唇にしつかりとルージユを載せると、鏡の中の自分を見た。

さつと手櫛<sup>てくし</sup>で髪の毛を整え、口紅をバッグに放り込んで化粧室を後にした。

——でも、もし女性たちの言うソウマさんが、本当にあの相馬先輩で、万が一にもばつたり会ったとして、今の私に気が付いたりするんだろうか……

「……って、そんなこと、考えるだけ無駄よね」

と、志穂はわざと口に出して言った。そうすることで、胸の中でぐるぐる巡る<sup>めぐ</sup>「もしかして」の気持ちを吹き飛ばしたかったのだ。

会いたいか会いたくないかと聞かれれば、断然後者に決まっている。

けれど、正直に言えば、ほんの少し好奇心もあった。記憶の中で高校生のままの彼が、今どんなふうになっているのか……

顔だけは端整だったから今でもきつとモテるに違いない。いや、性格だって最高だと思っていたのだ。あの日までは。

——って、だから、どうして先輩のことばつかり思い出してるのよ。いい加減、頭から追い出さなくちゃ。

下唇を噛み、胸にバッグを抱えながら志穂は俯<sup>うつむ</sup>きがちに歩いた。彼のことを思い出すと、未だに胸が痛むのだ。砕け散った恋のトラウマ。けれど。

——今は恋をしたくないなんて、ただ逃げてるだけだ。そうよ、逃げてばつかりじゃダメよね。私、ちゃんと変わったんだし！ 今更トラウマなんかに卑屈<sup>ひくつ</sup>にならないで、

楽しく過ごしたらいいじゃない。

みんなのところに戻ったら、今度は逃げずに林さんと話してみようと心に決めて、志穂は伏せていた視線を上げた。そこで、通路の先に誰かが立っているのに気付く。

スマートにスーツを着こなす、すらりとした長身の男性だ。整った顔立ちをしていて……何故か驚いたような視線を志穂に向けている。

——どうしてこっちを見ているんだろう？

そう思いながらも、どうしてか志穂もそのスーツの男性から目が離せなくなった。そのまま横を通り過ぎようとしたところで、男性の口が動く。

「志穂……だろ？ 森園志穂！」

「……えっ？ あ、あの……？」

突然腕を掴まれて、志穂は一瞬ぎよっとした。けれど、すぐに「もしかして」という思いが胸に浮かぶ。志穂はぱっと顔を上げ、腕を掴んでいる男性の顔を真正面から見つめた。

瞬きを繰り返し、記憶の中の彼と、目の前にいる男性の姿を重ねる。何度も何度も。

「もしかして……相馬、先輩？」

「やっぱ、志穂か！ うわ、久しぶりだな。えっと……十年ぶりか？ すごい偶然だな！」

化粧室で女性達の話聞いていなければ、目の前にいるのが凌だと気付けなかったかもしれない。

それくらい、彼はすっかり大人の男性になっていた。日に焼けたやんちゃな高校生の面影おもかげなど、微塵みじんもない。しかも。

——どうしてこんなに嬉しそうなんだろう。

「……あ、あの、お久しぶりです」

凌とは対照的に、志穂は顔も声も強張こわばってしまった。当然だ。志穂にとって凌は、懐かしいだけの存在ではないのだから。

いや、でもそれは凌だって同じだったはずだ。凌が「女とは思えない」と言っているのを聞いてしまっただけから、志穂はあからさまに彼を避けたのだから。あの後には口をきかないどころか、顔も合わせないように逃げまくった。きつと凌だって、自分が志穂に避けられていることはわかっていたはずだ。

——それとも、私が急に避けたことなんて、先輩にとっては大して気にならない些細ささいな出来事でしかなかったんだろうか。

そう思うと、自分の顔が暗く沈むのがわかった。いつの間にか視線は床を這う——だから志穂は目の前に立っている凌が、どこか意地悪な視線で自分を見下ろしていることに気が付かなかった。

「志穂は誰かと一緒にきてるの?」

「え? はい。職場の同僚と」

ハツとして視線を上げると、につこりと微笑んだ凌と視線が交わる。その笑顔はどこか胡散臭い。

「そう、職場の人ならまたいつでも一緒にこられるよな」

「……は?」

「せっかく十年ぶりに再会したんだ。ちよつと抜け出さないか? ちよつと会社の飲み会を抜け出して、ひとりで飲み直そうと思ってたところなんだ。だから付き合え」

「なっ! ちよつと待ってください」

ぐいつと志穂の腕を掴んで、凌が歩き出す。こつちに選択権どころか、拒否権さえ与えないその態度に、志穂は困惑してしまふ。

「先輩、待ってくださいいったら……っ」

そう声を掛けても、凌は止まってくれる気配もない。志穂の腕を掴む凌の手は、振り解こうと思えばできないほど強くはなかった。本気で逃げようと思えば、簡単に逃げられたのかもしれない。でも……志穂は、その手を振り解けなかった。

それは、今の凌への興味が、十年前のトラウマを僅かに上回ったからに他ならない。けれど、それを認めるのは少しだけ癪だった。

だから店の外に出たところでやつと手を離してくれた凌に、大げさなくらいに怒っていますという視線を向ける。

「相変わらず強引なんですな」

そう言って睨み付けると、凌はふつと小さく微笑んだ。その笑顔は十年前とあまり変わっていないくて、志穂の胸は不覚にもきゅつと切なくなる。それを誤魔化したくて、志穂は慌てて口を開いた。

「抜け出してよかったんですか? 先輩も誰かと一緒だったんでしょ?」

——っていうか、合コンの最中だったの知ってますよ?

とはさすがに言わない。別に凌が合コンしていようと志穂の知ったことではない。そんなことを口にして、気にしていると思われるのはゴメンだった。

「いや、俺は人数合わせに呼ばれたただだから、早々に退散するつもりだったんだ。だからこれからひとりで飲み直そうと思って。……あー……その、引っ張ってきたのまじかったか?」

今更どこか申し訳なさそうな表情を浮かべる凌に、なんだか呆れて肩から力が抜けた。「……いえ、大丈夫です。でも連絡だけはさせてください。みんな心配すると思うんで」

「ああ、どうぞ」

「すみません」

志穂はそう言うと、バッグから携帯電話を取り出して、凌から少し離れてアリサに電話をかける。盛り上がっているのか、アリサが電話に出てくれるまでに少ししかかった。「もしもし、アリサちゃん？」

『志穂さん？ どこに行ってるんですか？ 林さんが心配してますよー』

「ごめんなさい。実はね、高校の部活の先輩に十年ぶりに偶然会っちゃって……」

『ああ、もしかして、せつかくだから飲みに行こうとかって話になっちゃいました？』

「そうなの。急にごめんなさい。必ず埋め合わせはするから」

『そっかあ、わかりました！ 十年ぶりならまあ、仕方ないですね。こっちは上手く言うておきます』

「うん、ごめんね。ありがとう」

アリサの返事にほっとしながら携帯を切って凌を見た志穂は、びくっと体を強張らせた。自分に向けられた彼の視線が、どこか冷たい光を放っている。

「相馬先輩？」

おずおずと声を掛けると、彼はすぐに優しい笑みを浮かべた。その変化に、志穂はやはり胡散臭いものを感じてしまう。

「あのさ、もう高校を卒業してから十年も経つんだし、先輩ってのはおかしくないか？」  
急にそんなことを言われ、志穂は大いに戸惑った。

「えっと……じゃ、じゃあ、相馬………さん？」

「それだとなんだか、会社にいるみたいで気分悪い」

——どうして急にこんなこと言い出すんだろう。相馬さんがダメって、じゃあ、名前と呼べってこと？

確かにもう高校生じゃないから先輩はおかしいのかもしれない。けれど、高校の時だって名前と呼んだことなど一度もない。だからか、名前で呼ぶことになんだか抵抗があった志穂は視線をさまよわせた。けれど、言わないときっと変に思われるだろう。

「なら……凌、さん」

小さな声でそう言うと、彼は満足げに口の端っこを持ち上げた。

「じゃあ改めて、俺の行き付けの店で飲み直そう。ここから近いから」

「……じゃあ、少しだけ」

歩き出した凌に付いて、志穂も歩きはじめた。

もう二度と会うことはないと思っていた凌が目の前にいる。夢みたいで、紛れもない現実。

時々振り返っては話しかけてくる彼の横顔は、懐かしいのに見知らぬ人のようだ。近付けばまた傷付くかもしれない。そう思いながらも、今の彼を知りたいという好奇心を止められない。

——君子危うきに近寄らずって言うけど、本当ね。私、全然君子じゃないもの。そんな自分に呆れつつ、志穂は苦い笑みを口元に浮かべた。

凌の行き付けだというバーは、落ち着いた雰囲気の店だった。控えめなオレンジ色の照明が優しく店内を照らし、静かにジャズが流れている。カウンターの棚には、ずらりと見たこともない洋酒の瓶が並んでいた。

『隠れ家的』な趣のある店を、志穂は一瞬で気に入った。

『落ち着いた素敵なお店ですね』

凌に促され、カウンターの端の席に座った志穂は、店内を見渡しながらそう言った。

「だろう？　ひとりでも入りやすいし、静かで落ち着く」

そう言って笑みを向ける凌から、志穂はさっと視線をそらした。どうも真っ直ぐに彼を見る事ができない。なにせ十年経っても未だに夢に見るトラウマの元凶だ。無理もないだろう。

「志穂、なに飲む？」

「……ええと、お任せします」

「ていうかお前、アルコール大丈夫なの？」

「あ、はい。弱くはないと思います」

「そうなんだ。じゃあ、適当に作ってもらおうわ」

「お願いします」

ぺこりと頭を下げ、志穂は小さく息をついた。

好奇心に負けてこんなところまで付いてきてしまったが、本当にこれでよかったのだろうか。

カウンターの上で組んだ指先を見つめ、志穂は今更ながらそんなことを考える。

時間が経って少しだけ冷静になった志穂の心に、不安とも後悔とも付かない気持ちが生じわたと広がってきていた。

「志穂」

「は、はい」

「ほら、飲み物きたよ」

「すみません」

志穂の目の前に、黄金色のカクテルが差し出される。凌は自分の前にあるビールのグラスを持ち上げると、志穂の顔を覗き込んできた。真っ直ぐに視線が重なり、志穂の心臓がどきっと大きな音を立てる。

「乾杯しないか？」

凌がグラスを差し出してきて、志穂も慌ててグラスを持ち上げようとした。けれど手

が震えてグラスが手から滑り落ちそうになる。

「おっと、大丈夫か？」

さっと伸びてきた凌の手が、志穂の手ごとグラスをしっかり握りしめてくれたおかげで、グラスを落とすことはなかった。

「……っ、だ、大丈夫ですっ。す、すみません」

驚いた志穂は、慌てて手を引っ込めようとした。

「そんなに無理矢理引っ張ったら零れるだろ。落ち着けっつて」

そう言っつて、更に強く手を握られる。

——ちよつと手を握られただけで、なに動揺してるのよ、私！

「す、すみません。もう、大丈夫です。なんだか少し酔っているみたいで……」

「そうなのか？ 気を付けろよ」

やっと手を離してくれた凌に志穂はほつとする。今度は両手でしっかりグラスを包みこんで、慎重にコースターの上に置いた。

今まで誰とも付き合ったことがないわけじゃない。過去の相手と一通りのことだっつて経験してきた。なのに、ただ手に触れられたくらいで動揺するなんてどうかしている。

志穂は速くなった鼓動を落ち着かせようと、ゆっくりと息を吐き出した。そして目の前のグラスを空けたら帰ろうと心に決める。

トラウマの元凶にこれ以上関わっていても、こちらの調子を崩されるだけだ。

そう思ったのに——

「なあ、志穂っつて、爪になにもしてないんだね」

「……っっ！」

グラスに添えていた手を、横からすつと掬い取られ、志穂は思わず声にならない悲鳴を上げた。せつかく落ちて着き掛けていた心臓が、再びどきつと音を立てる。

すぐにでも手を振り解きたかった。でもこんなことくらいで動揺していると思われたくなくて、志穂はなんでもない振りをして口を開く。

「爪がどうかしたんですか？」

「うん。ネイルもしてないし、短く切ってるし、珍しいなと思っつて」

「ああ、私、美容師なので」

そう言っつて、志穂はさりげなく凌の手から自分の手を引く。凌は「へえ」と、驚いたように目を瞬かせて志穂を見つめてきた。

「なんですか」

あまりにもじつと見つめられて居心地が悪くなり、志穂はぶつきらぼうにそう言っつた。「いや、志穂が美容師とはね。……あの志穂が」

くすつと笑いを含んだ声に、志穂は目の前に火花が散る錯覚を覚えるほど、かちんと



した。

——あの志穂が……ってどういう意味よ！ お洒落しゃれになんて興味もなかった、女とも思えないような私が、美容師だなんて似合わないとも言いたいの!?

急激に過去の悔しさが、ぼこぼこ湧き上がってくる。凌を目の前にながら、そんな感情が今まで鳴りをひそめていたのは、やはりこの再会があまりにも衝撃的だったからだろう。

けれど今の一言は、完全に志穂の中のトラウマを蘇よみがえらせてしまった。

さつきまで胸を占めていた凌への興味などどこかへ吹き飛んでいく。一気に胸の中で燃え上がった怒りとも悲しみともつかない感情を、志穂は必死に奥歯を噛みしめてこらえた。

「なんか想像つかないな」

「そうですね？　ちゃんとやってみますよお」

無理矢理笑みを浮かべてそう答えるが、こめかみの辺りがひくくとしてしまう。

「そうなんだ。志穂が美容師ね……やっぱり全然想像つかない」

——別に想像してただかなくて結構よ。私だってもう十年前のままじゃないんだから！

心の中でそう叫んだ志穂は、唐突に思い付いた。

——そうよ、色気ゼロで女とは思えないなんて笑っていた後輩が、この十年ですっかり女らしくなったってところを見せ付けてやればいいんだわ。自分の発言が間違っていたことを、思い知らせてやる……！

そんなことを考えついた途端、居心地の悪かった空間が急に最高のステージになった気がした。十年間、今夜のために頑張ってきたのだという気にさえなってくる。

志穂はすつと息を吸い込むと、背筋をしゃんと伸ばした。そして目の前のグラスを持ち上げて、にっこりと優雅な笑みを浮かべる。

——あの頃とは違う大人の女性になった私を見せ付けるのよ。

「そういうえば、さつき私のせいで乾杯しそびれてしまいましたね。なにに乾杯しましたしょうか？」

上目遣いに凌を見上げると、彼はぴくりと片眉を上げた。

「再会に……でいいですか？」

いつの間にか、指先の震えも治まっている。志穂が笑みを深めてそう問うと、凌もにこりと微笑んでグラスを差し出してきた。

「そうだね。十年ぶりの再会に」

「十年ぶりの再会に」

互いにグラスを寄せ、静かに合わせる。その澄んだ音は、まるで開戦を知らせるゴン



グのように聞こえた。

ここで十年分の努力の成果を見せ付け、トラウマを克服するのだ。

志穂はもう、夢に見るほど過去に囚われたくなかった。きっとこの再会は、神様が志穂にくれたチャンスに違いない。

黄金色のカクテルをぐつとあおり、志穂は真っ直ぐに凌を見つめた。

思えば再会してから初めて、真正面からしっかりとその顔を見た気がする。

あの頃と比べて髪は多少伸びているが、目力のある切れ長の瞳も、引き締まった口元も、昔とちつとも変わらない。悔しいが、化粧室で女性達が噂していたのもわかるほど人目を引くイケメンぶりだ。しかも、今なお陸上選手だった頃と変わらぬ体型をキープしている。

いかにも仕事ができますというスーツ姿も、舌打ちしたいくらい様になっていた。そういうえば、企画部の出世頭だと噂されてもいたっけ。

——イケメンで出世頭で、さぞ順風満帆な人生を歩んでいらっしやるんでしようね。

そう、志穂に大なるトラウマを植え付けたことなど、これっぽっちも知らないまま……

ふつふつと苛立ちが募る。けれど志穂はそれをおくびにも出さず、これ以上ないほどにつこりと微笑んだ。

「せんば……凌さんは、高校を卒業されてからどうしていたんですか？」

「ああ、俺は大学を出てから就職して、今は普通の会社員だよ」

凌はさらつと言うと、ネクタイに指を引っかけて緩める。その仕草が妙に色っぽくて、志穂は余計にいらつとした。そんな自分を落ち着けようと、志穂は慌ててカクテルを喉に流し込む。

——ううっ！ 男のくせに色気振りまいてんじゃないわよつ。もしかして私に喧嘩売ってる？ 女のお前よりも、俺のほうが色気あるぞーって見せ付けてるの？

絶対に負けてなるものかと、志穂は凌に対して勝手に対抗心を燃やす。

すると突然、「そんなことよりさ」と凌が身を乗り出してきた。

「お前まだお笑い好きなの？」

「は？」

すっかり戦闘モードになっていた志穂は、肩すかしを食らった気分になり、気の抜けた声を上げてしまう。そんな志穂にはお構いなしに、凌は楽しそうに言葉を続けた。

「だからさ、昔、志穂ってすごいお笑い好きだったろ？ よくDVDとか貸してくれたよな」

その表情は、十年前の『相馬先輩』を彷彿とさせ、志穂の胸に懐かしさと……苦い痛みが走る。

「そう……でしただけ？」

「覚えてない？」

「……もう十年も前のことですから。すみません」

志穂は曖昧に笑ってそう答える。だが、覚えてないなんて嘘だった。

そう、よく覚えている。好きなお笑い芸人が一緒だったのがきっかけで、凌と親しくなったのだから。あまりメジャーな芸人ではなく話の合う友達もいなかったから、凌が自分も好きなんだと言った時は本当に嬉しかった。

最初は、一緒にお笑い芸人の話題で盛り上がっているだけで満足だったのに、そのうちそれだけじゃ物足りなくなってきた……

そんな過去の自分を鮮やかに思い出し、胸の奥がひりひりする。それはもう何年も感じたことのない感覚だった。

「志穂？」

顔を覗き込んで声を掛けられ、志穂はびくんと肩を揺らす。

「え？ あ、あの……なんの話でしたっけ？」

あの頃の凌の姿と、目の前のすっかり大人の男性になった彼が上手く重ならず、志穂は一瞬パニックになった。

けれど、そこでハッと我に返る。

変わったのは、大人になったのは凌だけではない。自分も大人になったのだと。

——なにを今更、高校生に戻った気分になってるのよ。バカみたい。

志穂は少しだけ酔いが回って熱くなった息を、ほうつと吐き出した。そして冷静さを失いそうになった自分を落ち着かせようと、何度かゆつくりと深呼吸を繰り返す。

せつかく女らしく変わった自分を見せ付けてやろうと思ったのに、これではただの挙動不審な女じゃないか。

相手を見返すためには、いちいち感傷に浸っている暇はない。そう、わかっているのだが……さすがに志穂は、なんの心の準備もなくトラウマの元凶と対峙して、冷静でいられるほどの鋼鉄の心臓ではなかった。

それでも引くわけにいかない志穂は、「もう昔の私じゃない」と、心の中で必死に繰り返す。そうしているうちに、ようやく少し落ち着いてきた。

グラスに残っていたカクテルを喉に流し込んで、志穂は今度こそはと微笑んだ。

「すごく美味しいカクテルですね。同じ物をいただいてもいいですか？」

「ああ、いいよ。マスター、さっきと同じのね」

「ありがとうございます」

志穂はそう言うと、脚を組んで体ごと凌のほうを向いた。変わった自分を見せ付けるには、堂々としているほうがいい。びくびくしているから、いらぬ感傷に浸ってしま